

「社会小説」としての賀川豊彦『死線を越えて』

—「社会の発見」後の読者たちの期待と熱狂を読み解く—

田中祐介

問題の所在

賀川豊彦の長編小説『死線を越えて』は、1920（大正九）年10月に改造社から刊行された。1919（大正八）年創業の改造社が出版する初の単行本であり、社長である山本実彦の意気込みは相当であった。山本みずから同書を満載した車を引いて取次店へゆき、意気込みに感動した取次店側が「同書の販売に大いに力こぶを入れている」⁽¹⁾ほどであったという。刊行後は爆発的な売上げを記録し、第2部『太陽を射るもの』（1921年11月刊）が世に出る頃には180版に達した【下表参照】⁽²⁾。

その後も勢いは衰えず、第3部となる『壁の声きく時』（1924年12月刊）の出版直後にあたる1925（大正十四）年2月号の『改造』紙上の広告では、『死線を越えて』は284版、続編の『太陽を射るもの』も176版を数えるほどの驚異的な増刷であった。

『改造』紙上の広告にみる『死線を越えて』の増刷数推移

掲載月	1920年			1921年									
	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	11
版数	初版	4	8	11	17	30	40	53	65	80	95	150	180

（第2部『太陽を射るもの』刊行まで）

改造社が出稿した新聞広告によれば、『死線を越えて』を「一読した全国数万の青年は皆賀川崇拜」になった⁽³⁾。実際に第二高等学校（宮城県仙台市）のある学生は、1921（大正十）年9月25日の寮日誌に以下のように綴っている。

近く賀川豊彦氏が来仙する。舍へも来る事になる。自分は氏の『死線を越えて』を去年の夏休みに読んだ。其間又諸種の本を読んだが今だに記憶に鮮明に残つて居るのは『死線を越えて』のみだ。自分は氏のあの活躍に対して大いに尊崇の意を表して居る。自分は氏を現世の一大偉人と称したい。⁽⁴⁾

この学生がキリスト教主義の寮生であるために賀川豊彦への「尊崇」を一層強めたとしても⁽⁵⁾、それだけには帰因できない一般読者の熱烈な支持を示唆する事例と言えよう。読者の「賀川崇拜」の結果として、「東京の某小学校長」が「全財産を抛つて数百部を購」つたり⁽⁶⁾、賀川のもとに馳せ参じ、貧民救済事業に協力する者も現れたとも報じられた⁽⁷⁾。同書売り込んだ山本実彦自身も、読者の感激に言及して「青年子女蟬集してその手を握るを光栄とした」と記し、「我が国で予想だにすることのできなかった数十万部がプロやインテリの汗手に購われた」と、幅広い読者の支持を獲得したことを自負している⁽⁸⁾。『死線を越えて』の出版後の熱狂は、山本によれば「大正八年——十年までの我が思想的激変」の最中で起きた「奇現象」なのであった⁽⁹⁾。

一方でこの作品は、連載当初より文壇・批評壇の「悪評」を浴びることとなった。『中央公論』編集者の木佐木勝は自身の日記において、同誌編集長の滝田樗陰が「これはひどいもので、文章などまるで中学生の作文のようで、読むにたえないので途中で止めてしまった」と述べたと綴った⁽¹⁰⁾。木佐木自身も「中学生の作文」という滝田の評価に同調しつつ、連載当初から「何処へ行っても悪評ばかり」であった同作が、単行

本の刊行後に爆発的な売行きを示したことに「あの低俗な純情主義とセンチメンタリズムが受けるとは不思議だ」と漏らしている⁽¹¹⁾。また、小説家であり批評家としても旺盛に活動した江口渙は、「私は賀川氏が遂に芸術家でないと云ふ事が好く解つた」と述べ、「賀川氏は矢張実行家」とであると断定した⁽¹²⁾。

文壇・批評壇からその稚拙さを論難されながらも、「大正期最大のベスト・セラー」⁽¹³⁾となった『死線を越えて』の研究は今日でも乏しい⁽¹⁴⁾。同作の刊行に先立つ数年間は長編小説流行の時代でもあり、世間で流行した江馬修『受難者』(1916年)や島田清次郎『地上』(1919年)、長田幹彦の作品などに関しては、読者の受容論の観点から流行現象の同時代的な意味が検証されている⁽¹⁵⁾。しかし同じく長編小説であり売上も他を圧倒した賀川豊彦『死線を越えて』は、そのような検証の機会を実質的にもたず、読者の熱狂を生んだ時代的意義の考察が深まらないまま今日に至っていると言わざるを得ない。

本稿では以上の問題意識を踏まえ、『死線を越えて』連載時ならびに刊行後の文壇・批評壇の評価と一般読者の反応の内実を再検証し、「悪評」と同時に熱狂的な支持を集めた同作の時代的意義を考察する。この目的のために本稿では、同作が『改造』連載時から「社会小説」と銘打たれ、刊行時にも喧伝されたことに注目したい。同作が「社会小説」として打ち出される背景には、第一次世界大戦後における「社会の発見」という知的変動と、同時的に生じた諸生活領域の「社会化」の議論があった。その最中に登場した「社会小説」としての『死線を越えて』の時代的意義を考察することは、山本実彦が述べた「大正八年——十年までの我が思想的激変」の余波の一端を、今日的な視点から再発見することにもなるであろう。

1. 第一次世界大戦後における「社会」の発見とその影響

山本実彦の言葉にある「大正八年——十年までの我が思想的激変」、すなわち第一次世界大戦の終結直後の「思想的激変」の背景にあるのは、同時期に顕在化した社会問題と労働運動である。1918（大正七）年に勃発した米騒動に続き、翌19年には都下新聞同盟休刊事件⁽¹⁶⁾が生じ、戦後恐慌を迎えた1920年5月には日本初のメーデーが開催される。石田雄によれば、大正期の「米騒動以後の時期」の社会問題は「まさしく階級対立を内包した恒常的、構造的な現象として『社会』の中核的問題」となった⁽¹⁷⁾。これは明治期の社会問題が「国家秩序からはずれ、あるいはその秩序の攪乱要因となるもの」⁽¹⁸⁾、つまり共同体の周縁的・外部的な異境空間で生起する例外的事象と見做されたのとは対照的に、共同体の只中で生起する問題になったことを意味していた。

社会問題に対処すべく内務省では、貧民救護を主目的として1917（大正六）年に設置した地方局救護課が1919年12月には社会課に改称され、『死線を越えて』の出版年である1920年の8月には社会局として独立した⁽¹⁹⁾。また文部省では1921年6月に明治末期からの「通俗教育」の名称を廃し、管制上用いる公称として「社会教育」を定めた⁽²⁰⁾。社会教育政策の本格化に取り組んだ乗杉嘉寿は、「数年前までは社会といふ文字其れ自身に就て政府当局は余りいい感じを持つて居なかつた」にも拘らず、「社会」の語が文部行政の正式語となった驚きを「一種の奇蹟^{ママ}」であったと語っている⁽²¹⁾。

時を同じくして、社会問題を取り上げる雑誌の創刊も相次いだ。1919年だけを例としても、『死線を越えて』を掲載した総合雑誌『改造』（4月）、『解放』（6月）に加え、河上肇の個人雑誌『社会問題研究』（1月）、長谷川如是閑・大山郁夫の『我等』（2月）、新人会機関誌の『デモクラ

シイ』(3月), 堺利彦・山川均『社会主義研究』(4月)が創刊された。かかる新興の言論媒体においては, 従来の政治上のデモクラシーとともに「社会的デモクラシー」の議論が噴出した⁽²²⁾。

興味深いことに, 当時にあつてこの時代的変動は「社会の発見」⁽²³⁾と呼称された。早稲田大学教授であつた杉森孝次郎は, 1921年に「社会の発見」と題した文章で次のように述べている。

大戦は徒為に戦はれなかつた。それは世界をして, 社会を発見せしめた。発見する機運に向かはしめた。大戦前にも社会はあつた。けれども, 人はそれには気づかなかつた。⁽²⁴⁾

第一次世界大戦前にも「社会」は確かに存在したが, 人々はそれに「気づかなかつた」, つまり意識化することはなかつたという。杉森の文章の翌1922年に『社会政策と階級闘争』を上梓した福田徳三も「人類は, 時々大きな発見や発明をするものである」と述べ, 「其最大の一に数ふ可きもの」として「『社会』の発見」を挙げた⁽²⁵⁾。「社会の発見」とは, いわばこの時期の「知の地殻変動」⁽²⁶⁾がもたらした思想的事件なのであつた。

同時期には, 知的状況の変化に敏感なエリート青年の関心も「自己から社会へ」⁽²⁷⁾と移行し, 「社会青年」⁽²⁸⁾が誕生する。第一次世界大戦時に第一高等学校に在籍した林要は, 戦争も不景気も「大した印象」を残さずに「世間は見ず, ひたすらに自己の内へ内へと沈潜」⁽²⁹⁾していた学生たちに思想上の急展開が生じ, 「内省と沈潜とによつて発見された個性が, いまや社会の場に一つの地位を占めることになつた」⁽³⁰⁾という。それは「個性の再発見であるが, また同時に, 『社会』の新発見」⁽³¹⁾なのであつた。

以上のような「社会の発見」的状況において, 様々な生活領域で唱道

されたのが「社会化」のスローガンであった。長谷川如是閑は「社会化」という言葉が「あらゆる方面に使用」され、「之までは『国家化』とでも叫び相な人までが、口を揃へて『社会化』を唱へてゐる」状況を指摘した⁽³²⁾。事実、この時期の文学的言説でも「文芸の社会化」の必要性が盛んに議論されることになる。

「文芸の社会化」の主題を大々的に取り上げたのは、1920年から21年にかけて『讀賣新聞』紙上で繰り広げられた「文芸の社会化」論議であった。江口渙「文芸の社会化 とその得失を論ず」（『讀賣新聞』1920年5月21日－22日）を嚆矢として、小川未明、中村吉蔵、杉森孝次郎、有島武郎、本間久雄、馬場孤蝶、片上伸が続き、各々の立場から「文芸の社会化」に関する自説を展開した⁽³³⁾。

論議の先鋒である江口渙の論法は、この時期の「文芸の社会化」の論理を典型的に示している。

自然主義の流れを汲んでゐる人人は、いまだに個性の探求と云ふ事をのみ喧しく説き立ててゐる。私は何も個性の探求に少しも反対するものではない。然し、徹底的に個性の真を探求しようとすればその探求の眼は、勢ひ、更に進んでその個性を生んだ社会性、社会生活の探求にまでも向けられなければ嘘である。〔中略〕社会性、社会生活の探求にまで眼を進めるならば、その眼は直ちにその社会の文化の流が、如何なる障害に依つて進化を阻止されてゐるかと云ふことを発見するであらう。〔中略〕かく阻止されたる文化の流を正しい方向へ、人類が究極に於いて到達しなければならない最高の方向へ、導き直さなければならなくなるのも、亦、当然である。ここに最高の理想に生きようとする真の芸術家の、生れながらに持つてゐる偉大なる使命があるのだ。⁽³⁴⁾

「自然主義の流れ」を汲む従来の作家が喧伝する「個性の探求」を徹底

するならば「その個性を生んだ社会性、社会生活の探求」に移行しなければならない。「社会」を探求すれば「社会の文化の流」の進化を阻止する「障害」が見出されるであろうから、その「流を正しい方向」、すなわち「人類が究極に於いて到達しなければならない最高の方向」へ是正するのが「真の芸術」の「偉大なる使命」であるという。同様の主張は同時期の批評には散見され、例えば増田篤夫は「個人主義風の思想感情」を脱して「社会という観念を強める」必要性を説き⁽³⁵⁾、石坂養平は「民衆の騒擾や放火犯人」などの題材を「社会的」とみなす浅慮を退けながら、個人が「彼の住む社会を制御し、その社会が彼を制御する過程を本当に表現したもの」こそが本当の「社会的の内容」を有すると主張した⁽³⁶⁾。

もちろん「社会化」に反発する者もいたが⁽³⁷⁾、賛否が飛び交う「社会」性導入の議論は、佐々木味津三が「文芸の社会化と言ふ問題に血道をあげて、文壇全体がその熱病にかかつてる」⁽³⁸⁾と述べたように、『讀賣新聞』上の連載にとどまらず同時期の全文壇的な話題となっていたのである。

「社会化」の必要が説かれる中で、必然的に現れたのが「社会小説」の登場を待望する声であった。早い事例として高須梅溪は「新社会問題と文学」（『讀賣新聞』1818年9月29日）で、「日露戦役に於ける経済的膨張」と「欧州大戦以来の経済的変動」を経て「社会生活に大変動を起し、各種の社会問題が急潮のやうな勢ひ」で現れたにも拘らず「此の数年来、社会問題を取扱つた小説及び脚本の発表は、極めて少かつた」と不満を漏らす⁽³⁹⁾。その原因として高須は「自己の体験を重んじ、余りにも、自己の周囲を描くことにのみ執着した人々が多い」こと、あるいは社会問題を取り上げても「ともすれば、皮相的なものとなつて、新聞の三面記事をひき延ばしたもの、やうな結果」を生みがちであることを挙げる。高須はこのように「自己」偏重の文学を批判しながら「私は現社会が、新しい芸術的表現の下に出る社会小説を、衷心から、迎へやうとしてゐ

ることを確信する」と述べ、真の「社会小説」の出現に期待をかけたのである。

高須が「社会小説」待望を語った翌年の1919年には、島田清次郎の長編小説『地上』がベストセラーとなり、堺利彦によって「謂ゆる社会的文芸の代表的作家がもうどうしても現はれねばならぬ時」⁽⁴⁰⁾と評された。翌1920年には菊池寛が「改造的思想家連中」が「社会劇出でよ、社会小説出でよ」と唱える現状があると苦々しげに認めた⁽⁴¹⁾ように、「社会小説」への待望は着実に高まっていたと言えよう。まさしくそのような状況の中で、「社会小説」と銘打たれた賀川豊彦『死線を越えて』が世に現れることになる。

2. 「社会小説」としての『死線を越えて』の戦略

賀川豊彦『死線を越えて』は『改造』1920年1月号から5月号にかけて物語全体の約三分の一が掲載され、同年10月に残りの三分の二を加えて単行本として刊行された。同作品の連載から出版にかけての時期は、前節で確認したように、まさしく知的言説において「社会」が「発見」され、文壇・批評壇では「文芸の社会化」の「熱病」的議論とともに「社会小説」への待望が高まる最中であった。

『死線を越えて』の主人公である新見栄一は、神戸葺合の貧民窟に身を投じ、貧民の救済とキリスト教の伝道に献身する。貧困という社会問題に正面から向き合う点で時宜に合った主題の作品であると言え、同時代の読者の支持を受けたのも頷ける。しかし実のところ『死線を越えて』は内容面のみならず、連載時から刊行時の広報まで一貫して「社会小説」であることが明確に謳われた作品でもあった。つまり出版元である改造社が、当初からこの作品を時代の要請に応える「社会小説」として、戦略的に売り出そうとしたことが推察される。

の行逕は篇中の失恋思想家を髣髴せしむるものがある。此の記憶すべき新人の一大心血を濺げる社会小説が天下に歓呼さるるは当然のことであつて、本書を一読するによりて始めて社会諸相の解按を断じ得べきである。⁽⁴²⁾

ここで示されるように、『死線を越えて』は、「社会運動の唯一人者」である賀川豊彦により書かれた「社会小説」であり、主人公は「社会改造に全身を投げ出せる一青年」と打ち出された。「社会の発見」の知的変動の最中、文壇・批評壇では「社会小説」が待望される状況で、『死線を越えて』はまさしくそのラベルが貼られた作品として宣伝されたのである。

加えてこの宣伝文では、同作が単純に「社会改造」を主題とした作品ではなく、主人公である「一青年」の「恋の苦悶」や「旧道徳の父」との「争闘」、すなわち内面的な葛藤と打開を経てこそ社会問題解消としての「貧民教化」に至ることが示される。『死線を越えて』は新見栄一の「自己確立の書」⁽⁴³⁾と評される側面が確かにあるが、「自己」の確立を経て「社会小説」に至るという物語の道筋を示すことにより、「自己から社会へ」という当時の思想潮流の変化を体現した作品であると強く印象づける結果ともなった。しかも同作の作者自身が「我国唯一の貧民教化の体験者」であり「その行逕は篇中の失恋思想家を髣髴せしむるものがある」と作中の主人公と現実の作者の同定を示唆することで、責任ある出版元として物語の真実性を担保する効果も生んでいる。

先の広告文は、『改造』紙上のみならず全国紙にも掲載され、広く人々の目に触れることとなった⁽⁴⁴⁾。広告文ではその後も「此一大心血を濺げる社会小説が天下に歓呼さるゝは当然の事である」⁽⁴⁵⁾「此人が三十余年の惨胆たる苦しい体験を基礎として築き上げた此苦心の社会小説がどれだけ人生に対して寄与するかは一読した人でなければ分明しますまい」⁽⁴⁶⁾などと謳われ、改造社は「社会小説」としての『死線を越えて』を

打ち出してゆく。

この時期には『死線を越えて』以外にも「社会小説」の語を冠された小説は続々と登場した。1920年6月21日から『東京朝日新聞』で連載開始した長田幹彦「闇と光」⁽⁴⁷⁾は、連載前から「社会小説」と銘打たれ、著者みずから「これは私が最近に企て、ある新社会小説列冊中の一編」と明言した⁽⁴⁸⁾。ほかにも吉野臥啓「社会小説 猫の疑問」(『新公論』1920年2月号)、華井重武「社会小説 I・W・W・Wと彼女」(『雄弁』1920年4月号-9月号)、長尾和「社会小説 輝く山村」(『社会と教化』1921年11月号)があり、単行本では土山篁夫『社会小説 サボタージュ 怠業』(中外経済社、1920年)が刊行された。「文芸の社会化」論議が全文壇の話題となった1920年を中心に「社会小説」と銘打たれた作品が続出するなかで⁽⁴⁹⁾、賀川豊彦『死線を越えて』は内容面と広報面の条件が揃い、他の追従を許さない爆発的な売り上げに至ったと言えよう。

ここで本稿冒頭でも触れた『死線を越えて』の「悪評」が生じた状況についても確認しておきたい。この作品が熱狂的な読者を多く獲得する一方で、瀧田栲陰、木佐木勝、江口渙のように文壇・批評壇の周辺では「悪評」を浴びることもあった。なかでも中村星湖は『改造』連載当初の時点で「『社会小説』と断つてあるのは、編輯部の細工かも知れぬが、あゝいふのが社会小説だとすると、社会小説ほど下らない物はないやうに思ふ。幼稚で、蕪雑で、低級である」⁽⁵⁰⁾と、『死線を越えて』が「社会小説」の語を冠したことに「編輯部の細工」を意識しながら、そのラベルに実態が伴わないと酷評している。

このような「悪評」に関して注意すべきは、いずれも『死線を越えて』単行本の刊行後ではなく、『改造』連載開始(1920年1月号)の直後の時点で為された評価であったことである。滝田栲陰の発言が木佐木勝の日記に記されたのは1919年12月27日であり、連載初回の時点での感想である。木佐木自身も「自分も『死線を越えて』の連載が始まったとき〔中

略)読んでみたが、樗陰氏の言うとおりに中学生の作文というのが当たっていた。何処へ行っても悪評ばかり聞いたものだ⁽⁵¹⁾と明言している。江口が『時事新報』で「私は賀川氏が遂に芸術家でないと云ふ事がよく解つた」⁽⁵²⁾と評したのも連載初回時点での感想である。以上のように作品の拙さが特に「悪評」の原因となったことに関して、賀川自身が後年語った『死線を越えて』の成立事情を確認しておきたい(下線引用者)。

その後肺病はだんだんよくなって、私は貧民窟に入りました。それから十三年経ちました。一三年目に改造社の山本実彦氏が、貧民窟の私の事務所にやつて来て、その小説を出さうぢやないか、と云はれたので、私は、『死線を越えて』上巻の後の三分の一を新しく書き加へたのでした。その時に、前の三分の二の文章があまりごつごつしてゐて拙いと思つたのですが、妙なもので、一つ直さうと思へば、全部直さなければならなくなるし、十三年後の私の筆は、よほど昔よりは上手になつてゐるやうでしたけれども〔中略〕私は文章よりか氣持を取りたいと思つて文章の拙いことを全く見逃すことにして、嚴肅な血を略いた時の氣持を全部保存することにしたのでした。⁽⁵³⁾

『死線を越えて』の「前の三分の二」は「十三年」前、つまり賀川が18、19歳の青年であつた1906(明治三九)年から1908(明治四一)年に書かれたものである⁽⁵⁴⁾。加えて全60章の「前の三分の二」のうち、さらに『改造』掲載分は第21章までと全体の約三分の一に過ぎない。連載時には「何故生きている。〔中略〕自殺したいが、暗闇には行きたくないから生きている」⁽⁵⁵⁾(第7章)といった生の意味をめぐる煩悶、「私は何故お父様に嫌われるだろう。私は明治学院へ入学したのが悪かつたかしら？」⁽⁵⁶⁾(第16章)という父との不仲が描かれるものの、その父の死(第23章)や、新見栄一にとって大きな転機となる「イエスの弟子」となる決意(第30章)も、貧民窟移住の決意(第32章)やその後の生活もまだ

描かれていないのである。

つまり、『改造』掲載分の『死線を越えて』は、社会活動に身を投ずる前の10代の青年である賀川豊彦が、新見栄一に仮託して自己をめぐる煩悶を中心に綴った習作にほかならず、「悪評」が集中したのも頷ける理由があった⁽⁵⁷⁾。それでは『改造』連載時は同作を低評価しがちであった文壇・批評壇では、賀川の後年の加筆分を含み、劇的展開である受洗後の貧民窟生活をも描いた単行本の刊行後において、世間の読者の熱狂を見ながら『死線を越えて』をどう評価したであろうか。

3. 「思想的社会運動」の階梯をのぼる「成長」した読者

『死線を越えて』は『改造』連載直後には文壇・批評壇の「悪評」が目立ったが、単行本が刊行された1920年10月以降の後の言説に注意すると、単純な「悪評」から転じてその時代的意義（芸術的評価はさておき）を認める評言を様々に確認することができる。

例えば、刊行直後にあたる『新潮』の1920年12月号において平林初之輔は、一年間の文壇・批評壇の動静を総括しながら「文壇における大家の勢力」は「衰運に傾いてゐる」と指摘し、その原因を「文壇内部の勢力の消長ではなくて文壇対社会の関係によつてゐる」と、存在感を増す「社会」が文壇に動揺をもたらしたことを示唆した⁽⁵⁸⁾。平林は続く議論のなかで「賀川豊彦くんの自叙伝小説も何等かの使命をもつて今年の文壇を賑はした」⁽⁵⁹⁾と手短ながら、文壇が沈滞する状況で『死線を越えて』が現れた「使命」に言及している。

刊行後の『死線を越えて』は本稿冒頭の表でも確認できるように、翌1921年になると加速度的に増刷され、続編である『太陽を射るもの』が同年11月末に刊行された際には190版に至った。1921年には、多数の読者の熱狂的支持という現象を受け、作品の時代的意義をより具体的に

認める評言も見られるようになる。

例えば板谷治平は1921年8月13日の『やまと新聞』上で、『死線を越えて』を「歓迎した日本の読者階級」を、「強ち盲目だとか新らしいもの好きだとか言ひ得ないと恩ふ」と述べ、その理由として「現在の小説や戯曲が、どの様に倦きられたかを物語るからである」と、平林と同様に既存の文学の停滞を指摘し、それに満足しない読者の「歓迎」の妥当性を見出している⁽⁶⁰⁾。また、直木三十二は同年末の回顧記事において「愚と思ひながら何処かに潜む作者の体験からくる力を思ふとき世のプロ作家、評論家達口賢しけれど未だ途遠しの感を抱かざるを得ない」と、作者の体験に裏打ちされた『死線を越えて』の物語の力は、新興のプロレタリア小説や評論を凌駕すると位置づけた⁽⁶¹⁾。直木は「繰返すが問題は芸術的であるかないかでは無い」と断りながら「その口にしてゐる生活が真実であるか如何に力強いかといふ事だけである」と、内容に真実性が認められる『死線を越えて』を支持するのであった⁽⁶²⁾。

柴田勝衛は板谷や直木以上に、『死線を越えて』が文壇・批評壇に与える影響の大きさを認める。柴田は同作のほかにも江原小彌太『新約』、島田清次郎『地上』など続々と現れる長編小説が「何万部といふ需要を充たした所以」について、単なる「広告や商略の巧さ」ではない「今年の文壇を反省さす可き、もつと深い根柢があるやうに思はれる」と示唆した。加えて『死線を越えて』のような「文壇以外の畑から」の長編小説が支持される状況において「文壇の内部」からも「新しい美の世界を創造しようと、努力した作家」が現れ、作品は「仮りに社会小説だとか、労働小説だとか、乃至はもつと広い意味で民衆芸術だとか、無産階級の芸術だとかいふ名称を以て呼ばれるやうになつた」と語る⁽⁶³⁾。既存の文壇のいわば外部から現れた長編小説が文壇内部の反省材料となり、変化を生じさせたとの指摘である。

この時期には興味深いことに、『改造』連載当初は「悪評」を下した江

口渾も姿勢を改め、作品の社会的意義を認めるに至る。本稿冒頭および第3節で確認したように、江口は『改造』に連載初回が掲載された時点では、賀川を評価していなかった。そこには作品に「如何なる深刻な、或は悲痛な体験」が刻印されようとも、「それが芸術家の手をくゞらなければ、遂に何等の芸術的効果をも生み得ない」という江口の信念があった⁽⁶⁴⁾。

その江口の評価に変化が生じたのは、単純に『死線を越えて』が爆発的に売れたという事実によるのではない。江口がまずその背景に見出したのは、読者層の「成長」という社会的条件であった。江口は長編小説が市場を席卷する現状を踏まえ、その流行の原因を次のように語っている。

所謂青年男女は数年前までは主に通俗小説を読んでゐた。つまり新聞や婦人雑誌の絵入小説である、処が読者の観賞力は時代の進歩と共に次第に成長して来たにも係らず、作者の芸術力は一向発展しなかつた、さうして読者と作者との間に次第に距離が出来てくると共に、最早在来の絵入小説では満足出来なくなつた。然も一方所謂文壇人の短篇は余りに文壇人的に特殊化され、「私小説」的短篇が多くなつた結果、多数の読者には其作者に対する個人的興味以外、さう大した興味も起させないといふやうな原因から、これ亦充分の満足を文壇的短篇によつて満たされることが出来ない⁽⁶⁵⁾。

江口によれば、「所謂青年男女」は数年前までは「通俗小説」を読んでいたが、その「鑑賞力」は時代の推移とともに「成長」し、満足し得なくなっていた。それにも拘らず「作者の芸術力は一向発展」せず、「文壇人」が綴る「私小説」にも読者は満たされなかった。そのような状況があいまって、長編小説の需要が高まったのだという。

江口はこの続稿では、副題に「長編と社会小説との関係」と掲げ、「近

頃の長編流行に見遁すべからざる特殊な現象がある」と前置きし、賀川豊彦『死線を越えて』と島田清次郎『地上』の流行の背景を分析した。

あゝいふ色彩の所謂力作が、その芸術的価値如何に係らずどしどし売れ出したといふ事は、天下の青年男女の心の底に斯かる社会運動的精神の芽が生じて来た何よりの証拠である。これは勿論こゝ数年の間に潮の如く日本の社会全般に押拡がった新しい思想の影響、所謂社会思想の激しい動揺と、その発展とに原因してゐるのはいふ迄もない。⁽⁶⁶⁾

『死線を越えて』や『地上』などの「力作」が、「芸術的価値」はさておき爆発的に売れた背景には、「天下の青年男女の心の底」に「社会運動的精神の芽」が生じた事実がある。その理由を「新しい思想の影響」「社会思想の激しい動揺と、その発展」に見出す江口は、作品の非芸術性をもっぱら問題視する姿勢から転じて、その社会的意義を認めるに至っている。引用に続けて江口は「武者小路君の影響によつて人道主義の洗礼を受けた青年男女は、更に最近の社会思想の動揺と発展とに遭遇して、もう一つ次の階段を昇り出した。詰り思想的社会運動の階段である」と述べる。江口が『死線を越えて』を「力作」と評した背景には、「思想的社会運動の階段」をのぼるまでに「成長」した読者層の存在がある。その「成長」した「鑑賞力」を満足させる相応の力をもった作品として『死線を越えて』を評価したと言えよう。

かかる読者層の「成長」に対して、特に女性読者を苦々しく眺める一部の識者もいた。「J1生」と称する評者は「未だ『死線を越えて』を通読してゐない」と公言し、賀川豊彦が「忽ち読書界の崇拜児」となったことを「そんなに大したものなのかしら？」と疑問に思うが、「曾て其一部分を読んだ際の軽侮が、何うしても抜け切らない為めに通読する気になれぬ」という。その「軽侮」を強めるのは、『死線を越えて』の女性読者

の存在であった。

銀座の街頭を得々として、あの本を小わきに抱へて歩ませ給ふ鉢割れ髪の女などを見掛ける時に、心からの失笑を禁じられなくなる。⁽⁶⁷⁾

『死線を越えて』の人気を底上げしたのは「青年子女蝟集してその手を握るを光栄とした」⁽⁶⁸⁾と山本実彦が述べたように、当時急増する女性読者でもあった。女性読者は近代的教育の機会の拡大とともに増加し、明治後期以降、『少女の友』（実業之日本社、1908年創刊）、『少女画報』（東京社、1912年創刊）、『令女界』（宝文館、1922年創刊）、『少女俱樂部』（大日本雄弁会講談社、1923年創刊）等の少女雑誌、大正期には『婦人公論』（中央公論社、1916年創刊）、『主婦之友』（東京家政研究会、1917年創刊）、『婦人俱樂部』（大日本雄弁会、1920年創刊）などの婦人雑誌が相次いで創刊された。実際、『死線を越えて』の刊行後、賀川は女性誌にも寄稿しており、潜在的な女性読者の関心の高まりを窺わせる⁽⁶⁹⁾。「J生」の発言は存在感を増す女性読者に対する男性評者の「軽侮」の眼差しが、女性読者が愛読する『死線を越えて』への「軽侮」にも転化した事例と言えよう。同様の態度は、同作を「読者の涙を誘ふものがあるにはありますが、それ等はすべて安価なセンチメンタリズム」と切り捨てる川路柳虹にも「女なんかゞ芝居へ行つて、泣くといふ、又泣きに芝居を見に行くといふ、それと同じ程度の最も卑劣な涙を唆るものであるからです」といった形で共有されている⁽⁷⁰⁾。このような男性評者の「軽侮」は、それだけ『死線を越えて』を支える新しい読者層の「成長」を逆説的に証明するものでもあった。

結論と展望

本稿では賀川豊彦『死線を越えて』が一般読者から熱烈な支持を集めて爆発的に売り上げたという「奇現象」(山本実彦)の時代的意義を再検証してきた。

第一に賀川豊彦『死線を越えて』は、第一次世界大戦後の「社会の発見」、そしてそれに伴う「文芸の社会化」の「熱病」的議論の最中に登場した「社会小説」であった。『改造』連載時から改造社の大々的な広報戦略の一環として「社会小説」と銘打たれたことが窺われるが、「社会」の観念が急速に顕在化する状況下で「社会小説」の語を冠することにより、同時代の読者の潜在的な待望意識に即応する効果があったことが推定される。

第二に同作は、「一青年」の「恋の苦悶」や「旧道德の父」との「争闘」といった個人の内面的な葛藤と打開を経て、貧民窟という社会問題に向きあう物語として展開する点で、「自己から社会へ」移行する当時の知的潮流を体現し、読者が追体験しうる作品でもあった。『改造』連載時に貧民窟での生活が描かれなかったことは、単行本刊行に際する広告文でその事実が明らかになることで、連載時からの読者の期待を増幅したことが想像されよう。

第三に同作は、「通俗小説」に満足できず、かといって「私小説」的短編にも興味をもてない数的質的に「成長」した読者たちの欲求を満たす長編作品でもあった。読者である「天下の青年男女の心の底」には「社会運動的精神の芽」が生じ、「思想的社会運動の階段」をのぼりつつあった。そのような読者の潜在的欲望に、長編の「社会小説」である『死線を越えて』が合致したと言える。

第四に文壇・批評壇の「悪評」は主として『改造』への連載当初、すな

わち賀川豊彦が10代後半の青年期に書きたいわば習作に対してなされたものであった。単行本刊行後は、芸術的価値はさておき、読者の支持を集める力をもつ作品としての評価が様々であった。低評価の文壇・批評壇と高評価の一般読者という二項的な把握は、ともすると知的読者と大衆読者の評価の二分という単純な理解に陥りがちである。しかし単行本刊行後の文壇・批評壇の評価を検証すれば、そのような二項的な把握は『死線を越えて』の時代的意義を正確に捉えるための妨げになると言えよう。

とはいえ本稿は『死線を越えて』の作品価値を再発見し、称揚するものではない。本稿の意図は、同作が熱狂的に支持されるに至る社会的条件を炙り出し、大正期の知的変動の最中に同作が担った役割と時代的意義を考察することであった。前節に挙げた江口渙の批評は読者の「成長」と「社会運動的精神」の萌芽を指摘したが、決して読者と『死線を越えて』の共鳴関係を無条件に讃えるものではなかった。江口は続けて以下のように発言している。

思想的社会運動といふと一寸変に聞えるかも知れないが、要するに身に危険を及ぼさざる程度の社会運動、机上的社会運動をいふのである。かういふ心の持ち主は自分の心の内だけでは多少とも社会主義的傾向を持つてはゐるが、偕てそれを実行に移して危険を冒してまでも戦ふだけの勇氣はない。然しそれを小説中の諸人物がそれへやつて呉れるので堪らなく嬉しくなる。其結果社会的不平を幾分でも慰めても呉れるし、又緩和しても呉れる。かういふ風な心持から、賀川君や、島田君の小説に天下の青年男女が翕然と集つたのではないのだらうか。(71)

江口にとって「思想的社会運動」とは、自分の身には危険の及ばない「机上的社会運動」であった。「社会」を変革する意思是「思想的」にとど

まり、その実践を「小説中の諸人物がそれへやつて呉れる」ことで読者は慰めを得る。そのような読者の「社会的不平」を擬似的に解消してくれる存在こそが、島田清次郎の小説の主人公であり、賀川豊彦『死線を越えて』の新見栄一なのであった。

実際、『死線を越えて』の新見栄一は、貧民窟救済に献身するいわば偉人的存在であり、読者はその偉人に自己を仮託し、物語を通じて貧民窟救済を擬似的に体験することで、人道主義的な欲求を満足させる構造になっていると言える。その際に注意すべきは、貧民窟の住民たちは「醜い跛」⁽⁷²⁾、「痘瘡^{あばた}の醜い」⁽⁷³⁾、「青く水腫れした顔」⁽⁷⁴⁾、「貧血で青褪め、幽霊のように髪を乱した」⁽⁷⁵⁾、「燐のために下顎が腐つて、前歯がすべて抜け落ちている」⁽⁷⁶⁾、「恐ろしい^{やつ}糞れた顔に犬歯が著しくのびて、ほんとに般若のような顔」⁽⁷⁷⁾といった具合に、貧民窟外部の人々とは明らかに異質な、しばしばグロテスクな表象として描かれることである。篠崎美生子が「新見以外の登場人物が現れるときでも、まず外見が紹介されるパターンがしばしば踏襲されている」⁽⁷⁸⁾と指摘する『死線を越えて』の語りの手法は、貧民窟の住民の異質性をことさら強調する結果を生んでいる。

たとえ新見栄一の経験に基づくとはいえ、外部的描写の先行により異質性が強調されることで、作中の貧民窟は「理性／狂気、富有／貧困、健康／病気」⁽⁷⁹⁾の後者を体現する空間として編成される。成田龍一が前者は後者の否定としてたちあられると指摘したように、『死線を越えて』の読者も異質な貧民窟描写の体験を通じて、自己が異質でない安全圏、すなわち理性・富有・健康の側にいることを確証しながら、近代社会内の外部的異郷である「暗黒」としての貧民窟救済に立ち挑む擬似体験を得ることになる⁽⁸⁰⁾。

そのような読書経験とは、いわば社会問題がすでに「社会」の中核的問題となった大正期において、旧来の明治期的な社会問題のありかた、

すなわち国家秩序からはずれ、その秩序の攪乱要因となるような周縁的事象としての貧民窟の救済を擬似体験する面を色濃く残している。賀川自身の貧民窟生活の開始がまさしく明治末のことであったとしても、その経験に基づく物語が読まれることは、一般社会とは隔絶した「暗黒」的空間を「探訪」する⁽⁸¹⁾構造を、第一次世界大戦後の社会において再生産することにほかならない。それは江口渙の言うように「危険を冒してまでも戦ふだけの勇氣はない」読者にはうってつけの物語の構造であったとも言えるが、「社会」の中核的問題の解消を謳う革新的な立場からは糾弾されることも必然であった。

事実、『死線を越えて』の刊行から約一年半後には、賀川豊彦は武者小路実篤、倉田百三とともに「現代の思想界を支配する唯物史観的傾向と対立した精神的、人格的、唯心的の傾向を著しく示して」おり、「社会奉仕といふ観念よりも自己完成といふ観念をより強く示してゐる」と批判され、「強き観念の下に建設された厳かな偶像も一度は階級闘争の台風のために、吹きとばされなければならぬ」と総括されている⁽⁸²⁾。このような新たな時代の推移の中で、『死線を越えて』、それに続く『太陽を射るもの』『壁の声きく時』がどう受容され、作者としての賀川豊彦の同時代的な評価がどう形成されたかは、今後の研究課題として改めて検討すべきであろう。

最後に、一部の読者が先入観から『死線を越えて』を「軽侮」し、通読や再読の機会をもたなかったことは戦後まで尾を引き、同作の文学史上の位置づけが十分になされない結果を生んだことを指摘しておきたい。稲垣達郎・猪野謙二・勝本清一郎・平野謙・中野重治による大正文学をめぐる座談会⁽⁸³⁾では、猪野謙二が「私なんかには「死線を越えて」などつまらんものだという先入主がありまして、読むべき時期に読んでない」と述べたのを皮切りに、中野重治も「雑誌が出たとき僕は高等学校の生徒だ、十七、八かね、それで読まなかったからね。二、三行読んだけ

れども、あとは読まないのだ。こっちは佐藤春夫を読んでいる」と述べる⁽⁸⁴⁾。平野謙も同様に回顧し、「あのころはくも文学少年だったが、当時、「改造」に何百版というような広告をするので、よけいに買う気がしなかった。当時の文学青年にはよく売れるということがすでになんとなくまやかしくさいというような気分があった」⁽⁸⁵⁾とまさしく一般読者の支持の高さから『死線を越えて』を嫌ったと語っている。

一方で座談会では、「あれはやはりちゃんと読んでおかんといかんね」(中野重治)、「木下尚江などを再評価するのと同じに、賀川豊彦も読まなくちゃいけないでしょうね」(平野謙)といった具合に、大正当時には忌避した『死線を越えて』を再読し、文学史上の位置づけを「再評価」する必要性に関しても表明されていた。しかし本稿冒頭で言及した研究蓄積の乏しさが物語るように、そのような機会は十分にもたれずに今日に至ったと言えよう。『死線を越えて』およびその他の賀川作品の再検証⁽⁸⁶⁾は、近代文学研究における今後の課題として依然として残されている。

注

- (1) 当時『中央公論』の編集者であった木佐木勝が仄聞した話として日記に留めている(木佐木勝『木佐木日記 一』現代史出版会、1976年、166頁)。
- (2) 作表時には辻橋三郎「賀川豊彦の小説(上)」『日本文学』第8巻7号、1959年、491頁に掲載の同趣旨の表も参照した。
- (3) 例えば『讀賣新聞』1921年3月12日、朝刊、7頁。
- (4) 1921年の『忠愛寮日誌』(東北大学史料館蔵)より。
- (5) 実際に賀川豊彦が仙台を訪れた際、忠愛寮では「舎生一同が揃つてお出迎した」ほどの「熱狂の度」を示したという(『忠愛之友倶楽部五十周年記念誌』二高忠愛之友倶楽部、1941年、49頁)。
- (6) 『改造』1921年1月号広告。
- (7) 同前。

- (8) 栗田確也編『出版人の遺文 改造社 山本実彦』, 栗田書店, 1968年, 8頁。
- (9) 同前同頁。
- (10) 1919年12月27日の日記より。木佐木勝『木佐木日記 一』現代史出版会, 1976年, 88-89頁。
- (11) 1920年10月15日の日記より。木佐木『木佐木日記 一』, 166頁。
- (12) 江口渙「新年の創作評(3)」『時事新報』1920年1月8日, 夕刊, 10頁。
- (13) 瀬沼茂樹『本の百年史 ベスト・セラーの今昔』出版ニュース社, 1965年, 137頁。
- (14) 先行研究が乏しいなかで, 篠崎美生子「賀川豊彦『死線を越えて』の位置」(『賀川豊彦学会論叢』, 第28号, 2020年11月, 80-103頁)は, 主人公新見栄一とその父の「内面」語りの分析から同作の類型的読みを乗り越えようとする試みである。
- (15) 例えば山本芳明『文学者はつくられる』(ひつじ書房, 2000年)の第3章「慰めの女 江馬修『受難者』の時代」や, 同じく山本の「島田清次郎『地上』の読者論」(学習院大学文学部研究年報, 第48号, 2001年), 「長田幹彦の位置 大正文学を長編小説の時代として〈注釈〉する」(『日本近代文学』第69集, 2003年10月)が挙げられる。
- (16) 日本新聞労働組合連合編『新聞労働運動之歴史』大月書店, 1980年, 6-8頁。
- (17) 石田雄『日本の社会科学』東京大学出版会, 1984年, 104頁。
- (18) 同前同頁。
- (19) 大霞会内務省史編集委員会編『内務省史』第1巻, 大霞会, 1971年, 338-344頁。
- (20) 文部省編『学制百年史 記述編』ぎょうせい, 1972年, 528-529頁。
- (21) 乗杉嘉寿『社会教育の研究』同文館, 1923年, 173頁。
- (22) 太田雅夫『増補 大正デモクラシー研究 知識人の思想と運動』新泉社, 1990年, 44-51頁。
- (23) 飯田泰三『批判精神の航跡』筑摩書房, 1997年, 194頁。ほか, 有馬学「社会の発見」『日本の近代4 「国際化」の中の帝国日本』(中央公論新社, 1999年), 荻部直「『社会の発見』とその影 シンポジウム雑感」(『日本思想史学』第35号, 2003年), 酒井哲哉「国際関係論と『忘れられた社会主義』 大正

期日本における社会概念の析出状況とその遺産」(『思想』945号, 2003年1月), 米谷匡史「矢内原忠雄の〈植民・社会政策〉論 植民地帝国日本における『社会』統治の問題」(『思想』九四五号, 二〇〇三・一), 川島章平「福田徳三における『社会の発見』と個人の生」(『相關社会科学』15号, 2005年), 織田健志「共同性の探求—長谷川如是閑における『社会』概念の析出」(『同志社法学』59巻2号, 2007年), 飯田泰三『大正知識人の思想風景 「自我」と「社会」の発見とそのゆくえ』(法政大学出版社, 2017年)なども参照のこと。

- (24) 杉森孝次郎「社会の発見」『中央公論』1921年7月, 2頁。
- (25) 福田徳三『社会政策と階級闘争』改造社, 1922年, 1頁。
- (26) 有馬学「社会の発見」『日本の近代4 「国際化」の中の帝国日本』中央公論新社, 1999年, 279頁。
- (27) H・スミス『新人会の研究 日本学生運動の源流』(松尾尊兌・森史子訳) 東京大学出版会, 1978年, 211頁。
- (28) 内田義彦・塩田庄兵衛「知識青年の諸類型」『近代日本思想史講座第四巻 知識人の生成と役割』講談社, 1959年, 272頁。
- (29) 林要「新人会のころ」東京大学協同組合出版部編『歴史をつくる学生たち』, 東京大学協同組合出版部, 1947年, 144頁。
- (30) 同前, 157頁。
- (31) 同前同頁。
- (32) 長谷川如是閑『『社会化』の暗殺 社会化の思想的根底』『我等』1921年7月号(『長谷川如是閑集』第四巻, 岩波書店, 1990年, 149頁)。
- (33) 小川未明「文芸の社会化に関する私の意見」(1920年5月24日-25日), 中村吉蔵「文芸の社会化 『縦』と『横』との文芸」(1920年5月26日-27日), 杉森孝次郎「文芸の社会化 文芸の革命児を呼ぶ」(1920年5月28日-29日), 有島武郎「文芸の社会化 時代精神との結合」(1920年6月2日-3日), 本間久雄「文芸の社会化 結局は個性の問題」(1920年6月4日-5日), 本間久雄「文芸の社会化か? 社会の文芸化か?」(1920年12月22日-23日), 馬場孤蝶「文芸の社会化か? 社会の文芸化か?」(1920年12月24日), 片上伸「文芸と社会との交渉」(1921年1月1日, 5日)。
- (34) 江口渙「文芸の社会化〔1〕 とその得失を論ず〔上〕」(『讀賣新聞』1920年5月21日, 朝刊, 7頁)。

- (35) 増田篤夫「小説の社会化に就いて」『新潮』1920年4月号, 215頁。
- (36) 石坂養平「個人と社会との相制を論ず」『新潮』1920年2月号, 6-7頁。
- (37) 例えば堀木克三「文芸と社会性」(『早稲田文学』1920年7月号)や中戸川吉二「個人への奉仕」(『新潮』1920年11月号)など。
- (38) 佐々木味津三「社会文芸私議」『新潮』1920年7月号, 118頁。
- (39) 高須梅溪「新社会問題と文学」『讀賣新聞』1818年9月29日, 7頁。
- (40) 堺利彦「無名作家の=処女作小説=『地上』を読む」『時事新報』1919年6月25日, 5頁。
- (41) 菊池寛「文壇は時勢に遅れたるか」『新潮』1920年4月号, 18頁。
- (42) 『改造』1920年10月号の広告。
- (43) 辻橋三郎「賀川豊彦の小説(上)」『日本文学』第8巻7号, 1959年, 492頁。
- (44) 例えば『讀賣新聞』1920年10月12日, 朝刊, 1頁。
- (45) 『東京朝日新聞』1920年10月18日, 朝刊, 1頁。
- (46) 『改造』1921年8月号。
- (47) 『東京朝日新聞』の1920年6月21日から1921年2月19日まで連載, 21年6月に春陽堂から単行本刊行。
- (48) 長田幹彦「社会小説『闇と光』に就て」『東京朝日新聞』1920年6月20日, 朝刊, 6頁。
- (49) もっとも, 「社会小説」の語自体がこの時期に初めて現れたわけではない。この語は明治期に現れ, 明治30年代には「社会小説」をめぐる議論が交わされた。しかし大逆事件により社会主義の冬の時代を迎えて用いられなくなったところが, 第一次世界大戦後に再登場したことになる。金子明雄「明治30年代の読者と小説—『社会小説』論争とその後」(『東京大学新聞研究所紀要』, 第41号, 1990年)を参照のこと。
- (50) 中村星湖「二月の創作と評論 危機に瀕せる『労働文学』【四】」『読売新聞』1920年2月9日, 朝刊, 7頁。
- (51) 木佐木『木佐木日記 一』, 166頁。
- (52) 江口「新年の創作評(3)」, 10頁
- (53) 賀川豊彦『『死線を越えて』を書いた動機』『繁明を呼び醒ませ』第一書房, 1937年, 121頁。
- (54) 岩田ななつ「賀川豊彦『死線を越えて』論 女主人公・田宮鶴子から見えてくるもの」『明治学院大学キリスト教研究所紀要』第47巻, 2015年, 115-

116頁。

- (55) 賀川豊彦全集刊行会編『賀川豊彦全集』第14巻，キリスト新聞社，1964年，34頁。
- (56) 同前，81頁。
- (57) もっとも，雑誌連載時から『死線を越えて』を評価する声も皆無ではなかった。太田善男「初春の文壇（1）論壇は挙つて単なる唯物論的立脚地に基く社会運動に反対」（『讀賣新聞』1920年1月1日）は「芸術として完成品であるかどうかの問題は別にして，一箇の人間の記録として極めて意義ある物であると思ふ」と評し，有馬尼亭「新春の文壇」（『やまと新聞』1920年1月9日，夕刊，1頁）は連載初回を「自分は一息に読んだ」と述べ，「表現の様式に多少の不满はあるが全篇を貫く感激が何より尊い」と高評価を与え，賀川を「文壇のくろうとをあつと言はせて彗星的に現れた」存在と位置づけた。
- (58) 平林初之輔「大正九年の文壇を評す」『新潮』1920年12月号，22頁。
- (59) 同前，25頁。
- (60) 板谷治平「八月の創作及評論」『やまと新聞』1921年8月13日，朝刊，1頁。
- (61) 直木三十二「月評，時に回顧（一）」『時事新報』1922年12月5日－6日。
- (62) 同前同頁。
- (63) 柴田勝衛「今年の文壇を顧みて」『新文藝』1921年12月1日。
- (64) 江口渙「新年の創作評（3）」，10頁。
- (65) 江口渙「長編流行の傾向〔五〕市場を風靡せる原因如何〔上〕」『讀賣新聞』1921年7月8日，朝刊，7頁。
- (66) 江口渙「長編流行の傾向〔六〕長編と社会小説との関係〔下〕」『讀賣新聞』1921年7月9日，朝刊，7頁。
- (67) JI生「新春の文壇（三）」『やまと新聞』1922年1月15日，朝刊，1頁。
- (68) 栗田編『出版人の遺文 改造社 山本実彦』，8頁。
- (69) 「苦痛とその救済」（『婦人之友』第14巻第10号，1920年10月，22-26頁），「全人的恋愛に就いて」（『婦人之友』第16巻第1号，1922年1月，17-20頁），「信仰に生きて行く人の心得」（『主婦之友』第6巻第1号，1922年1月，60-64頁），「三つの誘惑」（『女性改造』第1巻第1号，1922年10月，112-125頁）ほか多数。
- (70) 川路柳虹「クロオデル，その他」『新潮』1922年2月号，97頁。

- (71) 江口「長編流行の傾向〔六〕」, 7頁。
- (72) 賀川豊彦全集刊行会編『賀川豊彦全集』第14巻, 37章, 158頁。
- (73) 同前, 37章, 158頁。
- (74) 同前, 39章, 161頁。
- (75) 同前, 45章, 174頁。
- (76) 同前, 52章, 191頁。
- (77) 同前, 54章, 203頁。
- (78) 篠崎「賀川豊彦『死線を越えて』の位置」, 91頁。
- (79) 成田龍一『近代都市空間の文化経験』岩波書店, 2003年, 81頁。
- (80) 同前同頁。
- (81) 成田『近代都市空間の文化経験』, 87-88頁。
- (82) 小島徳彌「現代文芸に現はれた宗教思想を論ず 武者小路, 倉田, 賀川三氏の作品に就いて」『早稲田文学』1922年4月号, 196-197頁。
- (83) 「大正期の社会主義文学 『近代思想』から『文芸戦線』まで」柳田泉・勝本清一郎・猪野謙二編『座談会大正文学史』岩波書店, 1965年, 497-550頁。
- (84) 同前, 534頁。
- (85) 同前, 535頁。
- (86) 近年の論考として『乳と蜜の流るゝ郷』を扱った河内聡子「理想郷としての『乳と蜜の流るゝ郷』 産業組合の理論を越えて」(『雲の柱』第32号, 2018年3月), 『空中征服』を扱った菅原健史「賀川豊彦『空中征服』論 代替エネルギーと実現手段の探究」(『社会文学』第47号, 2018年)がある。